

4 揚州城における近年の出土瓦

李 久 海・劉 涛・王 小 迎

(揚州唐城考古隊・揚州市文物考古研究所)

A はじめに

揚州は著名な歴史古城で、長江下流域北岸と江淮平原の南端に位置し、北に江淮、南は長江と海口に臨み、地理的条件はすぐれている。史料によると、春秋末期に呉王夫差が北の中原に覇をとなえ、ここに邗溝を開き、邗城を造営したのは、今から 2500 年前になる。その後、楚の懷王の広陵城、漢の呉王劉濞の都城、江都国易王劉非、広陵国歴王劉胥などの諸侯国の広陵城もすべて邗城の上に造営された。つづいて、六朝時代の広陵城、隋の煬帝の江都宮、唐の子（衙）城、南宋時期の宝祐城がある。その城壁は興廃あるいは度重なる戦火破壊に遭遇しているけれども、城壁と濠の中心位置は終始大きく移動せず、現在まで使用されている。このように特殊な地位の歴史古城は中国においては少ない。したがって、その保護と研究は高い歴史的価値と保存的価値を有している。

揚州は、第1回全国歴史文化名城 24 箇所の中のひとつである。漢、六朝以後、北方において戦争が絶え間なく続いたことにより、比較的安定していた南方社会に、多くの富豪や手工業者が南下してきた。これらの人々の多くは江淮一帯に遷居し、江淮地区の経済や文化の迅速な発展を促した。そして、のちに重要な繁栄地域のひとつとなり、隋の中国統一と大運河の開削のための巨大な物質的基礎をつくったのである。隋の煬帝の統治時期には、江南を制御するために大運河を開削し、江淮を通じさせると同時に、揚州で土木事業をおこして行宮を造営し、江都宮とした。唐代になると、江都宮を引き続き利用して州府とした。唐代中期の安史の乱以後、北方社会は再び混乱し、経済は大きな打撃を受けたが、南方は比較的安定しており、経済の重点は南に移動した。

揚州は長江と大運河の交差点にあり、京杭大運河が南北を貫き、自然と中国の南北交通の要所となった。交通運輸は揚州の経済を迅速に発展させ、揚州はわが国最大の商品集積地となるだけでなく、わが国の東南地域のもっとも繁栄した商業都市で著名な対外貿易港のひとつとなった。当時は「揚（州）一益（成都）二」といわれ、「揚州富庶甲天下」の栄誉もあった。このとき、揚州の繁栄は頂点に達し、商人が雲集して人文の粋を集めた。南北の商業路は錯綜し、夜市には提燈があふれ、店が密集する活気のある景観であった。

卓越した地理条件と安定した政治局面は、多くの外地商人を揚州にひきつけた。彼らは各種の商業貿易活動に従事し、多くの商品が揚州の港を通過し、海のシルクロードをとって

世界各地に運ばれた。そして対外貿易の発展を促進し、諸国間の友好的往来を活発にするなど、重要な促進作用を引き起こした。

経済の繁栄はまた、文化芸術が発展する条件を与えた。これによって、唐代には著名な詩人が揚州を訪問し、人口に膾炙した詩篇を多くのこしている。唐代の高僧、鑑真大和上は、揚州の人である。彼は、文化を伝えるために6度の渡海をこころみ、10数年をへて両目の失明にいたるも、ついに日本に到達した。日中文化の交流と両国人の代々の友好のために多大な貢献をしたのである。

商業、手工業と交通運輸業が不断に発展するにつれて都市の規模も拡大し、もとの蜀岡上の城壁はすでに増大した需要をみたすことができず、蜀岡の下にある運河沿いから長江にむかって拡大していった。唐代の詩人杜牧は、詩のなかでつぎのように描写している。

「通りには多くの柳が茂り、霞は二重の城壁を映す。」

二重の城壁とは、蜀岡上の子（衙）城と蜀岡の下（大）城をさしている。総面積は18.25平方kmである。子城は大都督府となり、淮南道官衙府署があった。面積は羅城の5分の1をしめた。羅城は商工業と庶民の居住区である。都市の規模の拡大と都市の形状機能の区分けは、商工業のさらなる発展を推し進めた。

唐代揚州の繁栄とこの都市の地理的環境は密接に関連している。羅城は蜀岡下の沖積平野にあるため、水路が張りめぐらされ、羅城内には2本の南北方向の水路と2本の東西方向の水路が相互に通じ、井桁状になっている。主要な水路と道路はたがいに関交、平行し、水陸交通の幹線となる。このような構図は南方の水郷都市の特色をもっている。この水路にかけられた橋は「二十四橋」とよばれ、都市内の交通を潤滑にし、景観をも形成した。「二十四橋明月夜」は唐代揚州の美観を表現したものである。

羅城内には南北の大通りが6条、東西の大通りが14条あり、そのうち南北幹道は3条、東西幹道は4条で、南北幹道と幹道の間隔は650m、東西の幹道と幹道の間隔は1000m。道路幅は5～10mだが、幹道は幅10mあり、それぞれ城門に通じている。橋と道路もつながり、縦横に交錯して、城内を碁盤のように区画している。こうした里坊の構図は明清時代まで引き継がれ、現在の揚州の老城区にもその一部が保存されている。ただし、これまでの発掘調査によると、唐代の羅城内からは里坊の塀の遺跡が見つからず、唐代の揚州は道路で区画し、坊塀を設置しなかったのではないかと疑問がある。史料にも記載がないため、さらなる調査をとおして検討する必要がある。

唐代の著名な詩人は揚州の橋の美しさを愛でた。行き交う船が多く、夜市も盛んな揚州の繁栄振りを描き出している。たとえば、「二十四橋明月夜、玉人何処教吹簫」「十里長街市井連、月明橋上看神仙」「入郭登橋出郭船」「夜市千灯照碧雲、高樓紅袖客紛々」など、唐代揚州城の構造や夜市がひらいているような風景が描かれている。大量の考古学的資料と唐代の詩句のなかの描写を結びつけると、揚州が開放的な商業都市であり、坊と坊の間には塀がな

かったと想像できる。

揚州の手工業生産はきわめて発達しており、羅城内では大型の手工業工房区や分散した家内工業的工房も多くみつまっている。とくに羅城の中心に位置する南北官（市）河と「十里長街」の東西両側には、各種の店舗が林立していた。このような店舗では全国の窯で焼成された陶磁器を扱い、自分で生産した手工業品も売買していた。同時に、店舗内には多くの小規模な工房址が発見された。このように表が店で裏が工房であるような家内的工房と、かなり集中的に操業する大規模な工房の分布は、揚州城内における経済的繁栄ぶりを示している。唐代中期以後、揚州の経済的繁栄は全国でもトップクラスであり、唐王朝も集財の地として依存していた。このとき揚州の歴史的地位や都市の規模は、東西の両京（長安、洛陽）につぐ第三位の都会であった。しかし、唐末五代に戦乱がひろがり、繁栄していた揚州の城壁も破壊されて地下に埋没し、千年の謎となったのである。

唐代揚州城の研究は、国内外の考古学界と歴史学界から注目された。20 世紀の初頭には、羅振玉、劉恩培らが、収集した墓誌と文献記載を結合して、揚州城の考証をした。抗日戦争時期、日本の安藤更生が揚州で考古学的調査をおこない、『唐宋時期の揚州』を執筆した。新中国成立後は、南京博物院と揚州の考古学・史学の研究者が揚州城で多くの調査と試掘をおこない、重要な成果をあげた。そして 1981 年には、揚州で「唐代揚州城遺址學術討論会」が開催された。しかし、考古資料が不足し、零細な遺跡やわずかな文献記載に限られたことから、学界では揚州の羅城の範囲について意見の一致をみなかった。

その後、1984 年に都市改造建設中に羅城南門遺跡を発見し、考古学界や史学界からも大いに注目された。1987 年には、中国社会科学院考古研究所と南京博物院、揚州市文化局が連合して揚州唐城考古隊を結成し、これまでの研究を基礎として関連史料と結びつけ、城内全域に対する系統的な考古調査と重点的な発掘調査をおこなった。この 20 年ほどの考古調査、ボーリング調査と試掘は、学界の長年にわたる未解決の疑問を解決し、千年も地下に埋没していた揚州城の全貌がしだいに明らかになった。そして、発掘調査と大量の遺物、地層の上下関係や文化内容をとおして、揚州の羅城の範囲、規模、構造と造営年代などについて明確な認識をもつことができるようになった。

1996 年、揚州城は全国重点保護單位に指定された。唐代揚州城の研究は、現在、羅城内で考古学的調査がおこなわれている。子城は残りが比較的良好で、都市保存のための重点核心区に設定されているため、ボーリングと試掘のみの調査を実施しているにすぎない。

2004 年から、揚州唐城考古隊と揚州市文物考古研究所は、羅城遺跡内の市文昌広場や錦旺苑小区、世界動物之窗や瘦西湖レジャー村などの都市改造建設計画にもとづいて、緊急発掘をおこなった。以下では、ここから出土した瓦当、丸瓦、平瓦、文様磚を紹介する。

文昌広場（考古発掘工地番号 04YWGE）は、市文河路と文昌路の交差点の南東 100m のところにあり、ここは唐代羅城内の中心である。西は有名な「十里長街」と官河に接し、商業

経済繁栄地区の核心地帯になる。遺物はきわめて多く、唐青花磁のほとんどはここから出土した。錦旺苑小区（考古発掘工地番号 06YCJ）は市友誼路と西路の交差点の南東約 100m のところに位置し、官河から西へ 50m 離れている。官河東岸は「十里長街」である。世界動物窓（考古発掘番号 06YSD）は、鉄佛寺の北東の唐子城東南角と唐羅城北城壁が接続するところの南辺に位置し、瘦西湖レジャー村（07YSXD）は、鉄仏寺南の古邗溝の旧河道の南岸に位置する。世界動物窓と瘦西湖レジャー村は唐子城南縁に近い。発掘の層位からみると、六朝、隋代の文化層は比較的豊富である。

以上の 4 地点から出土した比較的完形に近い瓦は、蓮華文軒丸瓦 40 点、丸瓦 3 点、平瓦 8 点、蓮華文磚 3 点がある。以下、これらについて紹介する。軒丸瓦は、蓮弁の形や間弁の有無と形状、中房内の蓮子の数と蓮弁の変化などから分類し、丸瓦と平瓦、蓮華文磚は出土した層にもとづき、形や文様、大きさなどから要点を説明する。

B 軒丸瓦

A 型 7 点。「円弁」蓮華文瓦当。蓮弁装飾の有無から 2 亜型 6 式に分類する。

Aa 亜型 5 点。蓮弁無装飾型。間弁の有無と間弁頂部の形の違い、蓮子の数の違いにより、I ～IV 式に分類する。

I 式 1 点。間弁に線がある。頂部は弧辺の三角形で、中房の蓮子は 7 つ。標本 06YCJT3④：7 は、胎土が精良で全体に浅い灰色を呈し、焼成温度は高くない。外縁が欠けている。八弁で円く豊満で突出し、弁の先端に小突起がある。蓮弁の長さ 2.5 cm、幅 1.7 cm。間弁には軸がある。間弁頂部は弧辺三角形。中房は円盤状で、なかに 7 つの蓮子をかざり、突出しない。中房径 3.1 cm、蓮子径 0.6 cm。中房の外側には珠文が一周し、28 個が残っている。おそらく 34 個の珠文があっただろう。珠文の径は 0.4 cm、珠文間の距離は 0.5 cm、大きさは均等で距離も等間隔である。外縁は平坦で基部はややすぼまる。幅 1.3 cm、瓦当面より 0.5 cm 高い。瓦当裏面には同心円状の回転渦文があり、接合部には指頭圧痕が残る。瓦当径 12.8 cm、厚さ 3.1 cm、残長 5.4 cm（図版 1－1・附図 3－3）。

II 式 1 点。間弁に軸がある。間弁頂部は Y 字形で、中房には 7 つの蓮子をかざる。標本 06YCJT4④：23 は、胎土が精良で浅い灰色を呈し、外縁が欠けている。八弁の蓮弁は楕円形で突出する。豊満だが、一部の蓮弁は押圧されて平らになっている。蓮弁長 2.8 cm、幅 1.7 cm。円盤状の中房は中くぼみとなる。中房径 3.2 cm、蓮子径 1.6 cm。蓮弁の外側には圈線と珠文が一周し、圈線は突出して幅 0.4 cm ある。珠文は摩滅しているが、32 個を確認することができた。外縁は平坦で花卉よりやや突出し、基部はすぼまる。幅 1.3 cm、瓦当面より 0.8 cm 突出する。瓦当裏面はかなり平らで、凹線文が一周する。接合部には指頭圧痕が残る。瓦当径 13.7 cm、厚さ 2.6 cm、残存長 3.2 cm（図版 1－2・附図 4－1）。

III 式 2 点。間弁に軸がない。間弁は弧辺三角形のみで、円盤状の中房には 7 つの蓮子を

かざる。標本 06YCJT3④ : 8 は、胎土が精良で青灰色を呈し、焼成温度は高い。瓦当が欠けている。八弁の蓮弁は豊満で突出する。蓮弁長 2.4 cm、幅 1.7 cm。間弁は突出した三角形である。円盤状の中房は径 3.2 cm、蓮子径 0.5 cm。蓮弁の外側には珠文が一周し、計 32 個ある。摩滅がはげしいが等間隔である。外縁は平らで欠けており、基部はすばまる。幅 1.2 cm、瓦当面より 0.8 cm 高い。瓦当裏面も欠けており、幅が広く深い回転渦文があり、接合部には指頭圧痕が残る。瓦当径 12.5 cm、厚さ 2.9 cm、残存長 3.4 cm (図版 1-3)。

IV 式 1 点。間弁はⅢ式と同様。ただし、中房には 9 つの蓮子をかざる。標本 06YCJT4④ : 18 は、胎土が精良で灰黒色を呈し、焼成温度は高い。瓦当は完形で、八弁の蓮弁は楕円形で突出する。全体に豊満で稜が通る。間弁は突起した小さな三角形で、蓮弁長 2.8 cm、幅 2.3 cm。円盤状の中房は突出し、直径 3.2 cm、蓮子径 0.6 cm。蓮弁の外側には圈線と珠文が一周し、圈線幅 0.2 cm。珠文は形が整っており 35 個ある。外縁は平らで欠けており、基部はすばまる。幅 1.1 cm、瓦当面より 1.2 cm 高い。瓦当裏面は欠けており、幅が広く深い回転渦文があり、接合部には指頭圧痕が残る。瓦当径 13.9 cm、厚さ 3.4 cm (図版 1-4・附図 4-3)。

Ab 亜型 2 点。蓮弁の外側に輪郭線をかざるタイプである。中房内の蓮子数や間弁によって I 式と II 式に分類する。

I 式 1 点。蓮弁外周に輪郭線がある。間弁は突起した三角形文。中房には 7 つの蓮子がある。標本 06YCJT3④ : 9 は、胎土が精良で浅い灰色。焼成温度は比較的高い。瓦当は欠けており、八弁の蓮弁は楕円形で突出する。蓮弁長 2.3 cm、幅 1.7 cm。蓮弁の周囲には U 字形の凸線の輪郭があり、さらに突起した三角形文がある。円盤状の中房は突出し、直径 2.6 cm、蓮子径 0.6 cm。蓮弁の外側には圈線と珠文が一周する。圈線の幅は 0.1 cm、珠文は明確で 37 個ある。珠文の径は 0.4 cm、間隔は 0.3 cm。瓦当外縁は平らで基部はすばまる。外縁幅 1.3 cm、厚さ 0.4 cm。瓦当裏面も欠けており、同心円の回転渦文がある。接合部には指頭圧痕が残る。瓦当径 12.4 cm、厚さ 2.7 cm、残存長 3.1 cm (図版 1-5・附図 3-4)。

II 式 1 点。蓮弁外周に輪郭線がある。間弁には軸がある。間弁頂部は弧辺三角形。中房には 9 つの蓮子がある。標本 06YCJT4③ : 1 は、胎土が精良で青灰色。焼成温度は比較的高い。瓦当は欠けており、八弁の蓮弁はやや扁平である。蓮弁長 2.1 cm、幅 1.7 cm。蓮弁の周囲には U 字形の凸線の輪郭がある。間弁には軸があり、頂部は弧辺三角形である。中房は瓦当面より低く、残存径 2.5 cm。5 つの蓮子が残る、蓮子径 0.5 cm。蓮弁の外側には圈線と珠文が一周する。圈線の幅は 0.2 cm、珠文は 21 個残存する。珠文径は 0.4 cm、間隔は 0.3 cm。瓦当外縁は平らで基部はすばまる。外縁幅 2.1 cm、厚さ 0.4 cm。瓦当裏面も欠けており、比較的平坦で浅い回転渦文がある。接合部には指頭圧痕が残る。瓦当径 12.1 cm、厚さ 2.3 cm、残存長 2.8 cm (図版 1-6・附図 5-1)。

B 型 14 点。先端の尖った蓮華文瓦当で、蓮子の数の違いから 2 亜型 4 式に分類する。

Ba 亜型 5 点。瓦当には八弁の蓮華文をかざり、蓮弁は突出して豊満である。間弁に軸

はなく、突出した弧辺三角形の装飾があるだけである。円盤状の中房には5つの蓮子がある。花卉の外側には、珠文と圏線がそれぞれ一周する。外縁は平坦で基部はすばまる。瓦当裏面には浅い回転渦文があり、接合部には指頭圧痕が残る。標本 06YSDJ1⑨：1 は、蓮弁長 3.1 cm、幅 2 cm、中房径 2.6 cm、蓮子径 0.7 cm。圏線の径は 10.5 cm、珠文は 31 個ある。珠文径 0.4 cm、間隔は 0.6 cm。直径 11.6 cm、幅 0.3 cm。瓦当外縁は平坦で幅 1.4 cm、高さ 0.9 cm。瓦当裏面は無文で平らである。瓦当径 14.8 cm、厚さ 3.2 cm、残存 5.8 cm（図版 1－7・附図 1－1）。

Bb 型 9 点。Ba 型と基本的に同じである。ただし、中房の蓮子は7つで、蓮弁の間隔と装飾の有無により、Ⅰ～Ⅲ式に大別した。

Ⅰ式 2 点。十弁の蓮華文で、間弁には軸がある。間弁頂部は一字形にちかく、中房は丸餅状を呈する。標本 07YSXDT9③：1 は、胎土が精良で青灰色を呈する。表面は灰黒色で、焼成温度は低い。花卉は柳葉形に突出し、弁形は豊満で稜が通る。蓮弁長 3.5 cm、幅 1.4 cm。間弁には軸があり、間弁頂部には一字形の模様をかざるので、間弁全体は T 字形を呈する。円盤状の中房は突出し、直径 1.4 cm。蓮弁の外側には圏線が一周し、その幅は 0.1 cm。瓦当裏面には凹凸のある深い回渦文がある。接合部には指頭圧痕が残る。直径 11.8 cm、厚さ 3 cm、厚さ 2.5 cm。残存長 3.0 cm（図版 1－8）。07YSXDT9④：2 は、07YSXDT9③：1 と形が類似しており、瓦当には八弁の蓮華文をかざり、弁長 2.2 cm、幅 1.2 cm、1.0 cm。蓮弁の外側には圏線が二周する。幅 0.2 cm。瓦当外縁も欠けており、外縁幅 1.1 cm、厚さ 0.4 cm。直径 9.7 cm、厚さ 2.5 cm、残存長 7 cm。

Ⅱ式 1 点。八弁の蓮華文で、間弁には軸がある。間弁頂部は一字形に近い。標本 07YCJT4④H2：4 は、胎土が精良な紅色で、表面は灰黒色を呈する。焼成温度は低い。花卉は柳葉形で突出し、稜がとおる。蓮弁長 2.8 cm、幅 2 cm。間弁全体は T 字形を呈する。円盤状の中房は突出する。中房径 2.4 cm、蓮子径 0.5 cm。蓮弁の外側には圏線が一周し、その幅は 0.2 cm。外縁は平たく、幅 1.2 cm、厚さ 0.6 cm。外縁上には 2 条の凹線文をかざり、基部はすばまる。瓦当裏面はわずかに欠けており、幅のある深い回転渦文がある。接合部には指頭圧痕が残る。直径 12.5 cm、厚さ 3 cm、残存長 7.5 cm（図版 1－9・附図 3－2）。

Ⅲ式 1 点。基本的にⅡ式と近いが、蓮弁の外側に圏線と珠文がそれぞれ一周する。標本 06YCJT3④：6 は、胎土が精良で褐色、瓦の表面は青灰色を呈する。八弁の蓮華があり、花卉は柳葉形で突出し、弁の輪郭線は硬く、稜が通る。蓮弁長 2.4 cm、幅 1.4 cm。円盤状の中房は中くぼみで、中房径 2.6 cm、蓮子径 0.5 cm。間弁は軸と頂部からなり、頂部は一字形をなして、全体では T 字形になる。蓮弁の外側の圏線の幅は 0.3 cm。珠文は 37 個あり、径 0.5 cm、間隔は 0.4 cm。大小は均等でやや摩滅している。外縁は平たく、基部はすばまる。幅 1.4 cm、厚さ 0.3 cm。瓦当裏面は欠けており、明確な浅い回転渦文がある。接合部には指頭圧痕が残る。直径 12.9 cm、厚さ 2.8 cm、残存長 3 cm（図版 1－10・附図 3－5）。

Ⅳ式 1点。八弁蓮華文で、間弁には軸がある。間弁頂部は一字形に近い。標本 06YCJT4④:21 は、胎土が精良で、表面は灰黒色を呈する。花卉は柳葉形で突出し、豊満で中央に稜がとおる。蓮弁長 2.6 cm、幅 1.8 cm。中房径 2.6 cm、蓮子径 0.5 cm、圏線幅 0.4 cm。珠文は 23 個残存するが、もとは計 36 個であろう。外縁は平たく、幅 1.9 cm、厚さ 0.6 cm。瓦当径 13.6 cm、厚さ 1.9 cm、残存長 9.2 cm。(図版 1-11)。

Ⅴ式 2点。八弁蓮華文で、間弁には軸がある。間弁頂部は一字形に近い。標本 06YF-05-03T③H3:1 は胎土が精良で表面は青灰色。焼成温度は高い。花卉は柳葉形で突出し、中央の稜は明瞭ではない。蓮弁長 2.4 cm、幅 1.5 cm。間弁全体は T 字形を呈する。円盤状の中房は径 2.8 cm、蓮子径 0.6 cm。蓮弁の外側には圏線が二重にめぐり、圏線幅 0.4 cm。圏線の間には珠文が一周し、大小は均一で計 43 個ある。外縁は平たく、幅 1.2 cm、厚さ 0.7 cm、基部はすぼまる。瓦当裏面には幅のある深い回転渦文があり中心は乳頭状に突出する。接合部には指頭圧痕が残る。瓦当径 14 cm、厚さ 2.7 cm、残存長 4.2 cm(図版 1-12・附図 10-2)。

Ⅵ式 2点。八弁蓮華文で、間弁に軸はないが、三角形の突起をかざる。標本 06YCJT4④:22 は、胎土が精良で薄い灰色を呈し、生焼けである。花卉は複弁の柳葉形で突出し、豊満で中央に稜がとおる。蓮弁長 2.8 cm、幅 2 cm。円盤状の中房は径 2.4 cm、蓮子径 0.6 cm。間弁は弧辺の三角形をかざる。蓮弁の外側には圏線と珠文がめぐり、圏線幅 0.4 cm、珠文は計 43 個、珠文径 0.5 cm、珠文間は 0.5 cm。外縁は平たく、基部はすぼまる。幅 1.0 cm、厚さ 0.4 cm。瓦当裏面には浅い回転渦文があり、接合部には指頭圧痕が残る。瓦当径 12.5 cm、厚さ 2.7 cm、残存径 3.4 cm(図版 1-13・附図 4-2)。標本 06YCJT3③H2:2 は、泥質灰陶で青灰色。蓮弁長 2.7 cm、幅 1.7 cm。中房はやや突出し、径 2.4 cm、蓮子径 0.5 cm。圏線幅 0.2 cm。珠文は 31 個あり、径は 0.5 cm、間隔も 0.5 cm。外縁は平らで幅 1.0 cm、厚さ 0.8 cm。瓦当径 12.7 cm、厚さ 2.9 cm、残存長 4.0 cm。標本 06YCJT4④:19 は破損がはげしく、残存長 2.4 cm。

C 型 20点。変形蓮華文瓦当で、蓮弁の形式の違いによって 3 亜型 10 式に分類する。

Ca 亜型 8点。桃形の変形蓮華文瓦当で、弁数、間弁の有無や違い、中房の蓮子の数から I~Ⅳ式に分類する。

I 式 1点。七弁の桃形弁。中房中央には突出した蓮子があり、その周囲に 6 つの蓮子がめぐる。間弁はやや幅広い T 字形で、突出している。標本 06YCJT2④:9 は、胎土が精良で薄い灰色、表面は青灰色を呈する。破損しており、瓦当の中心部分が残るにすぎない。蓮弁は楕円形で突出し、豊満で、長さ 1.7 cm、幅 1.3 cm。蓮弁の T 字形と中房は接続している。中房径 3.5 cm、珠文径 0.7 cm、瓦当径は 7.2 cm 以上、厚さは 2.5 cm 以上(図版 1-14)。

Ⅱ式 4点。八弁の桃形弁、中房中央には突出した蓮子があり、その周囲に 6 つの蓮子がめぐる。間弁は突出した Y 字形をかざり、斜縁で瓦当裏面は平滑である。標本 06YCJT2④:8 は、胎土が精良で薄い灰色、表面は深い灰色を呈し、焼成温度は高い。瓦当面は凸面状で

桃形の弁も突出する。弁長 1.5 cm、幅 1.3 cm。中房は蓮弁よりも低く、径 3.2 cm。蓮子径 1 cm と 0.8 cm。間弁の Y 型装飾は中房と接続し、蓮弁よりも低い。蓮弁の外側には圈線と珠文が一周し、圈線幅 0.4 cm。珠文の大きさは均等で、計 35 個。珠文径 0.6 cm、間隔は 0.2 cm。外縁は斜縁で基部はすばまり、幅 2.5 cm。瓦当裏面は平滑で、接合部には指頭圧痕が残る。瓦当径 14 cm、厚さ 1.3 cm、残存長 3.1 cm（図版 1－15・附図 4－4）。標本 06YCJT4④：20 は、蓮弁長 1.8 cm、幅 1.5 cm、瓦当の残存径 11.2 cm、残存長 2.7 cm。標本 06YSDTG 井：11 は、蓮弁長 1.6 cm、幅 1.4 cm、中房径 3.7 cm。瓦当裏面は平坦で、中央に指頭の押圧によるくぼみが 1 箇所ある。瓦当残存径 13.6 cm、残存長 2.6 cm。

Ⅲ式 1 点。八弁の桃形弁。中房には 1 + 7 の蓮子がある。瓦当面は全体に凸面で、蓮弁は豊満で突起している。中房は蓮弁よりも突出している。間弁はない。蓮弁の外側には圈線と珠文が一周し、外縁は斜縁。瓦当裏面は平坦で、中央に指頭圧によるくぼみが 1 つある。接合部には指頭圧痕が残る。標本 06YSDTG 井：1 は、胎土が精良で表面は浅い灰色。蓮弁長 1.8 cm、幅 1.5 cm、中房径 3.5 cm、蓮子径 0.9 cm。蓮弁外周の珠文は計 36 個で径 0.4 cm、間隔は 0.4 cm。外縁は幅 1.5 cm で、珠文より 0.3 cm 高い。瓦当径 13.3 cm、厚さ 3.2 cm、残存長 8.2 cm（図版 1－16・附図 2－2）。

Ⅳ式 1 点。八弁の桃形弁。中房には 1 + 7 の蓮子がある。蓮弁の外側には圈線と珠文が一周する。瓦当面は全体に凸面で、平縁。瓦当裏面中央には指頭圧によるくぼみが 1 つある。標本 06YSDTG 井：20 は、泥質灰陶で青灰色。蓮弁は豊満で突起している。蓮弁長 2.2 cm、幅 1.5 cm。中房は蓮弁よりもやや低く、径 3.9 cm、中央の蓮子径 0.9 cm、周囲の蓮子径 0.5 cm。珠文は摩滅しており、31 個が残存する。外縁の幅 1.9 cm。瓦当径 16 cm、厚さ 1.8 cm、残存長 3.9 cm（図版 1－17・附図 1－3）。

Ⅴ式 1 点。七弁の桃形弁。中房には 1 + 7 の蓮子があり、7 角形に配置されている。間弁は V 字形で珠文がともなう。標本 06YF－05－03T3③：4 は、胎土が精良で浅い灰色、表面は灰色を呈し、焼成温度は比較的高い。瓦当面は全体に凸面で、桃形蓮弁は突起している。蓮弁長 1.7 cm、幅 1.3 cm。中房中央の蓮子径 1.2 cm、外周の蓮子径 0.4 cm。間弁は V 字形で中房の周囲に接続し、中房より低い。蓮弁の外側には圈線と珠文が一周し、圈線幅 0.2 cm、珠文は大小均等で、計 34 個ある。珠文径 0.6 cm、間隔は 0.3 cm。外縁は平縁で、基部は斜めにすばまる。外縁幅 1.5 cm。瓦当裏面は凹凸があり、接合部には指頭圧痕が残る。瓦当径 13.8 cm、厚さ 1.1 cm、残存長 3.4 cm。（図版 1－18・附図 10－1）。

Cb 亜型 9 点。乳釘状の蓮弁をもつ瓦当。弁数の違い、間弁の有無とその形、中房蓮子の数量などにより、Ⅰ～Ⅲ式に分類する。

Ⅰ式 7 点。八弁の桃形弁。中房には 1 + 12 の蓮子があり、間弁は直線でその基部は中房に接続する。蓮弁の外側には圈線と珠文が一周する。瓦当面は全体に凸面をなす。外縁は斜縁で比較的平たく、瓦当裏面の中央には指頭圧によるくぼみがある。標本 06YSDTG 井：2

は、胎土が精良で青灰色を呈する。桃形弁は豊満で突出し、弁長 1.1 cm、幅 1 cm。中房は蓮弁より低く、直径 3.9 cm、中央の蓮子径 1.6 cm、周囲の蓮子径 0.5 cm。珠文は 42 個あり、径 0.4 cm、間隔 0.3 cm。大小は均等である。外縁の幅 2 cm。瓦当径 12.5 cm、厚さ 3.3 cm、残存長 4.2 cm (図版 1-19)。標本 06YSDTG 井: 8 は、胎土が精良で浅い灰色を呈する。桃形弁は突出し、弁長 1.6 cm、幅 1.4 cm。中房径 3.8 cm、中央蓮子径 1.5 cm、周囲の蓮子径 0.6 cm。圏線幅 0.4 cm。珠文は 42 個あり、径 0.5 cm、間隔 0.4 cm。外縁幅 1.9 cm。瓦当裏面中央には指頭圧によるくぼみがあり、接合部両端には指頭圧痕が残る。瓦当径 13.4 cm、厚さ 2.7 cm、残存長 3.8 cm。

Ⅱ式 1 点。06YSDG2: 2 は、灰白色の精良な胎土で、表面は浅い灰色を呈する。焼成温度はやや高い。九弁の珠文形弁で、中房の中央に珠文が 1 つあり、その周囲に圏線がめぐり、その外側に 12 個の蓮子がまわる。蓮弁は豊満で突出し、間弁はない。弁の外側には二重の圏線と二重の珠文が飾られる。圏線幅 0.3 cm。珠文は摩滅しており、大小配置は均等である。中房径 3.5 cm、中央の蓮子径 1.3 cm。蓮弁径 1.5 cm、外縁は平縁で基部はすばまる。蓮弁と外縁は同じ高さである。外縁幅 2.4 cm。瓦当裏面は平坦で、接合部には指頭圧痕が残る。瓦当径 16.5 cm、厚さ 1.3 cm、残存長 4 cm (図版 1-20)。

Ⅲ式 1 点。十三弁の桃形蓮弁。中房の中央には圏線をともなう蓮子が 1 個あり、その周囲に 11 個の蓮子がめぐる。蓮弁の外側には圏線が一周し、珠文はみられず、間弁もない。瓦当面は平坦の平縁である。形は整っている。標本 06YSDTG 井: 5 は、胎土が精良で浅い灰色を呈し、表面に朱をぬっているようだ。桃形弁は円形に近く、豊満で突出し、瓦当面より高い。蓮弁長 1.7 cm、幅 1.5 cm。中房径 5.2 cm、中央蓮子径 1.6 cm、周囲の蓮子径 1.6 cm。外縁幅 1.5 cm。瓦当裏面は平坦で、接合部には指頭圧痕が残る。瓦当径 13.5 cm、厚さ 2.4 cm、残存長 4.8 cm (図版 1-21・附図 2-1)。

Cc 亜型 異形蓮華文瓦当。3 点。蓮弁の形状の違いからⅠ式とⅡ式に分類する。

Ⅰ式 2 点。標本 06YCJT2③: 1 は八弁の蓮華文で、蓮弁長 1.6 cm、幅 2.0 cm、蓮弁は比較的写実的である。中房は全体にくぼみ、直径 3.3 cm、蓮子は 7 個で径 0.5 cm。間弁は弧辺の三角形で、かなり扁平（あるいは一字形ともいう）である。蓮弁の外側に残存する珠文は 21 個。平縁の幅 1.3 cm、厚さ 0.2 cm。瓦当裏面は欠けており、同心円状のナデ痕跡がある。瓦当径 12.1 cm、厚さ 2.3 cm、残存長 2.8 cm (図版 1-22・附図 5-2)。

Ⅱ式 1 点 標本 06YCJT2④: 10 は、胎土が精良で鉄灰色を呈し、焼成温度はやや高い。瓦当面は平坦で、変形の八弁蓮華文をかざり、間弁はない。蓮弁長 2.6 cm、幅 3.0 cm。中房は円盤状をなし、瓦当面と高さが同じで、9 個の蓮子をかざる。中房径 2.9 cm、蓮子径 0.4 cm。蓮弁の外側には圏線と珠文が一周し、圏線幅 0.3 cm、珠文は 23 個残存する。珠文径 0.4 cm、間隔は 0.4 cm。おそらく計 44 個があったと思われる。瓦当外縁は平縁で比較的狭く、幅 1.2 cm、厚さ 0.3 cm。瓦当面の装飾は簡潔である。瓦当裏面は平坦で、同心円状のナデ痕跡

がある。接合部の両端には指頭圧痕が残る。瓦当径 13.9 cm、厚さ 2.1 cm、残存長 3.7 cm（図版 1－23・附図 3－1）。

C 丸 瓦

丸瓦はⅠ式とⅡ式に分類する。

Ⅰ式 唐代中期。表面はやや赤みをおびた土色を呈し、凹面は布目である。長さ 34.0 cm、幅 15.5 cm、厚さ 1.2 cm。玉縁長 3.5 cm、幅 10 cm（07YSXDT3：⑧、図版 2－1）。

Ⅱ式 唐代後期。表面は灰黒色を呈し、凹面は布目。長さ 45 cm、幅 16.5 cm、厚さ 1.7 cm。玉縁長 3.7 cm、幅 11.5 cm（04YWGE④：39、図版 2－2・附図 6－1）。

D 平 瓦

Ⅰ～Ⅲ式に分類する。

Ⅰ式 唐代前期。灰色の胎土で、表面は青灰色を呈する。凹面は布目。長さ 29.0 cm、幅 27.0 cm、21.5 cm。厚さ 1.1 cm（07YSXDT9④：1、図版 2－3）。

Ⅱ式 唐代中期。灰色の胎土で、表面は灰黒色を呈する。凹面は布目。長さ 34.5 cm、幅 29.5 cm、24.0 cm。厚さ 1.3 cm（07YSXDT4⑤：H1、図版 2－4）。

Ⅲ式 唐代後期。灰色の胎土で、表面は赤みをおびた土色を呈する。凹面は布目。長さ 38.0 cm、幅 25.2 cm、21.5 cm。厚さ 1.1 cm（04YWGE④：29、図版 2－5・附図 7）。

このほか、揚州城の発掘調査では、比較的文字の多い銘文をもつ平瓦も出土している。灰色の胎土で、表面は赤みをおびた土色あるいは灰黒色を呈する。銘文はスタンプとヘラ書きとがある。内容は、「官」、「六官」「東窯焼造」、「西窯」などがある。スタンプの形状は、円形、方形、長方形、八角形などがある。銘文は、平瓦が出土した時点で多くは破片になっており、標本 1 点は唐代後期。瓦の表面には「官」がスタンプされ、灰赤色の胎土で、表面は赤みを帯びた土色を呈する。凹面は布目。長さ 35.5 cm、幅 24.5 cm、20.0 cm。厚さ 1.5 cm（07YSXDT3④：H1、図版 2－6・7）。

E 文様磚・獸面文瓦

スタンプ文の磚は灰白色の胎土で、表面は青灰色を呈する。厚さ 5.0 cm。磚の表面には花文、雲気文、圈線文、乳釘文などを組み合わせて図案とする（06YSDTG1 井 1、図版 2－9・附図 2－3）。

スタンプ文の磚は灰色の胎土で表面は青灰色を呈する。厚さ 5.5 cm。磚の表面には連弧文、圈線文、雲気文、乳釘文を組み合わせて図案とする（06YSCJT4④井 1：10、図版 2－10）。

獸面文瓦は 2 点ある。標本 06YCJT2④：11 は下部が欠けている。高さ 21.9 cm、幅 17.1 cm、厚さ 4.1 cm（図版 2－8・附図 5－3）。

G おわりに

上述の4地点から出土した瓦磚類は、発掘した出土層位によって時代を決定している。文昌広場から出土した丸瓦と平瓦の地層は唐代中～後期であり、同一の地層から出土した陶磁器は長沙窯産を主とし、鞏県窯産の白磁や青花も共伴する。錦旺苑小区出土の瓦当の層は、唐代長沙窯産の磁器片や開元通宝などを含み、唐代中～後期と推測する。ここから出土した瓦当の時代も唐代中後期より遡ることはないだろう。世界動物窓から出土した瓦当は、多くが井戸から出土している。井戸の時代は唐代後期～五代で、瓦当もこの時期に相当する。瘦西湖レジャー村で丸瓦が出土した層は唐代中期で、この層には、陶磁器では宜興窯、洪州窯産の青磁が多い。平瓦の出土した層位は比較的早く、だいたい唐代前期である。共伴した陶磁器は、盤口壺、豆形盤、餅足球腹碗などが多い。ゆえに、平瓦の時代は唐代前期より新しくはなることはない。銘文瓦の多くは、唐代後期～五代の時期の土坑から出土しており、共伴しているのは長沙窯、宜興窯、越窯、定窯などであるから、その時代もかなり新しく、唐代後期～五代に相当する。

同時に、Ca型Ⅱ式に属する06YSDTG井：11と06YSDG2：1は、それぞれ別つの地点から出土しており、Ca型Ⅲ式、Ca型Ⅳ式とCa型Ⅴ式の絶対年代は唐代後期～五代あるいはさらに新しい時期に相当する。このほか、Bb型Ⅰ式の06YCJT4④H2：4は南京出土の六朝時期のAb型Ⅲ式のNYW：106とかなり類似しており⁽¹⁾、その製作年代は六朝時期の可能性がある。現在の揚州天寧寺が、最初は東晋の謝安の邸宅であったという史実とも関連し、錦旺苑の位置が六朝時期の建物である可能性もある。Aa型Ⅰ式の06YCJT3④：7も、南京出土の隋唐蓮華文瓦当の蓮弁と形状や瓦当面の文様の構造などが類似しており⁽²⁾、また、これらの瓦当と唐代兩京地区の瓦当を比較すると、かなり大きな違いがある。したがって、揚州から出土した蓮華文瓦当は六朝時期の伝統をそなえており、かなり強い地方色を示しているといえる。

揚州は、歴史上、江淮ないし中国東南地区の政治、経済、文化の中心のひとつであり、隋代には江都宮を設け、唐代は兩京に次ぐ全国第三の都市となり、経済の繁栄は「揚一益二」の称誉を得た⁽³⁾。しかし、揚州城遺跡から出土する瓦当などの報告は比較的少なく⁽⁴⁾、上述の資料は揚州城遺跡の瓦当についての初めてのまとまった紹介である。

錦旺苑小区の建設工事現場は、長征西路の西端にあたり、唐代はにぎやかな羅城内に位置し、東は汶河（唐代城内の官河）から約300mである。世界動物窓の地点は、鉄仏寺の北東の唐代子城東南角と羅城北城壁が接する場所の南縁に近く、南側は邗溝の旧河道になる。世界動物窓の工地では唐代の建物基礎跡と磚敷きの道路遺構、唐から五代時期の瓦当、丸瓦、平瓦、文様磚などの遺物が発掘された。世界動物窓は、鉄仏寺と同じ小高い場所にある。この場所は1984年秋に南京博物院、南京大学歴史系、揚州博物館が200㎡の発掘調査をおこ

ない、唐～五代時期の建物基礎と磚敷き道路などを発掘し、スタンプやヘラ書きの銘文をもつ平瓦が出土した。それらは、「官」、「東窯焼造」、「西窯」などの銘がある。世界動物窓の発掘地点は 1984 年発掘地点の東側に近く、層位からみると 2 度の発掘で出土した建物の基礎は同一時期の遺構である。鉄仏寺は、文献によれば、唐の光化年間（899～901 年）に淮南節度使楊行密の旧宅で、後の楊吳時代に楊行密の行宮となる。

総合すると、揚州出土のこれらの瓦磚類は、すべて唐の羅城の範囲内にある唐代中期あるいは後期の層からのもので、同時に大量の遺物や遺構が出土したので、時代は唐代で間違いないだろう。しかし、一部の遺物は、南京や鎮江地区から出土した六朝の遺物と類似している。したがって、揚州から出土した瓦磚のうち一部は、唐代以前のものである可能性も排除できない。唐の羅城の創建年代は唐代中期であるが、揚州城の造営時期はさらに古く、のちにも利用され続けている。上述の 4 地点は唐代羅城内の重要な繁華街であり、出土した大量の遺物や遺構からみると、これらの建物の性格を追究するうえで唐代揚州城の構造や歴史的沿革などはみな重要な手がかりとなる。

註

- (1) 賀雲翱『六朝瓦当与六朝都城』文物出版社、2005 年、p.40。
- (2) 賀雲翱『六朝瓦当与六朝都城』文物出版社、2005 年、p.49。
- (3) 『資治通鑑』卷 259。
- (4) 南京博物院・揚州博物館・揚州師範学院発掘工作組「揚州唐城遺址 1975 年考古工作簡報」『文物』1977 年第 9 期。南京博物院「揚州古城 1978 年調査発掘簡報」『文物』1979 年第 9 期。優振暁・谷建祥「揚州市蜀崗唐城遺跡和遺物」『考古』1990 年第 4 期。中国社会科学院考古研究所・南京博物院・揚州市文化局「江蘇揚州市文化宮唐代建築基址発掘簡報」『考古』1994 年第 5 期。李則武「揚州新近出土の一批唐代文物」『考古』1995 年第 2 期。



図版1-1 揚州城出土軒丸瓦の型式分類 (1)

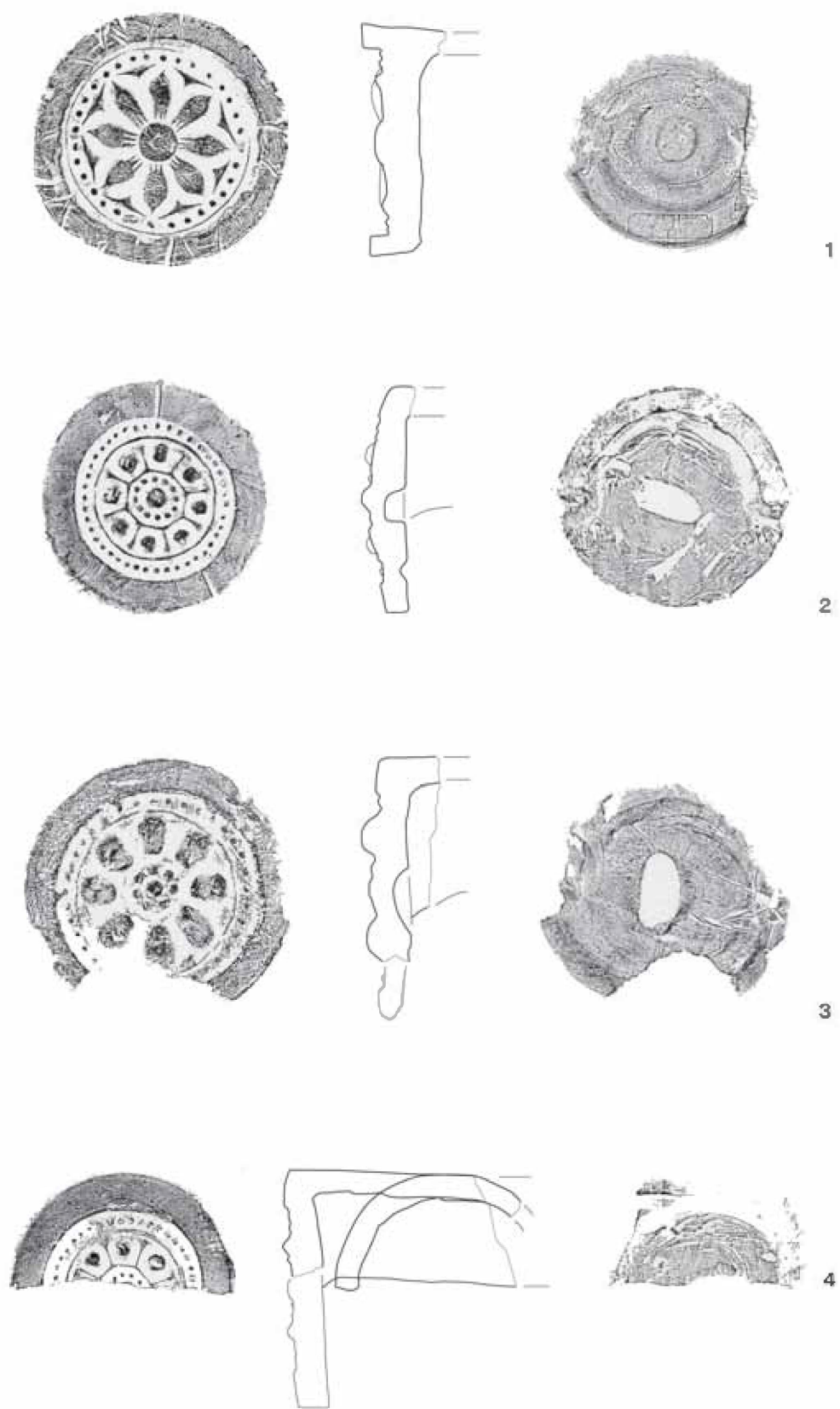
型	A 型 (円弁型)		B 型 (尖弁型)		C 型 (変形弁型)		
亜型	Aa 型	Ab 型	Ba 型	Bb 型	Ca 型	Cb 型	Cc 型
I 式	 1	 5	 7	 8	 14	 19	 22
II 式	 2	 6		 9	 15	 20	 23
III 式	 3			 10	 16	 21	

図版1-2 揚州城出土軒丸瓦の型式分類 (2)

型	A 型 (円弁型)		B 型 (尖弁型)		C 型 (変形弁型)		
亜型	Aa 型	Ab 型	Ba 型	Bb 型	Ca 型	Cb 型	Cc 型
IV 式	 4			 11	 17		
V 式				 12	 18		
VI 式				 13			

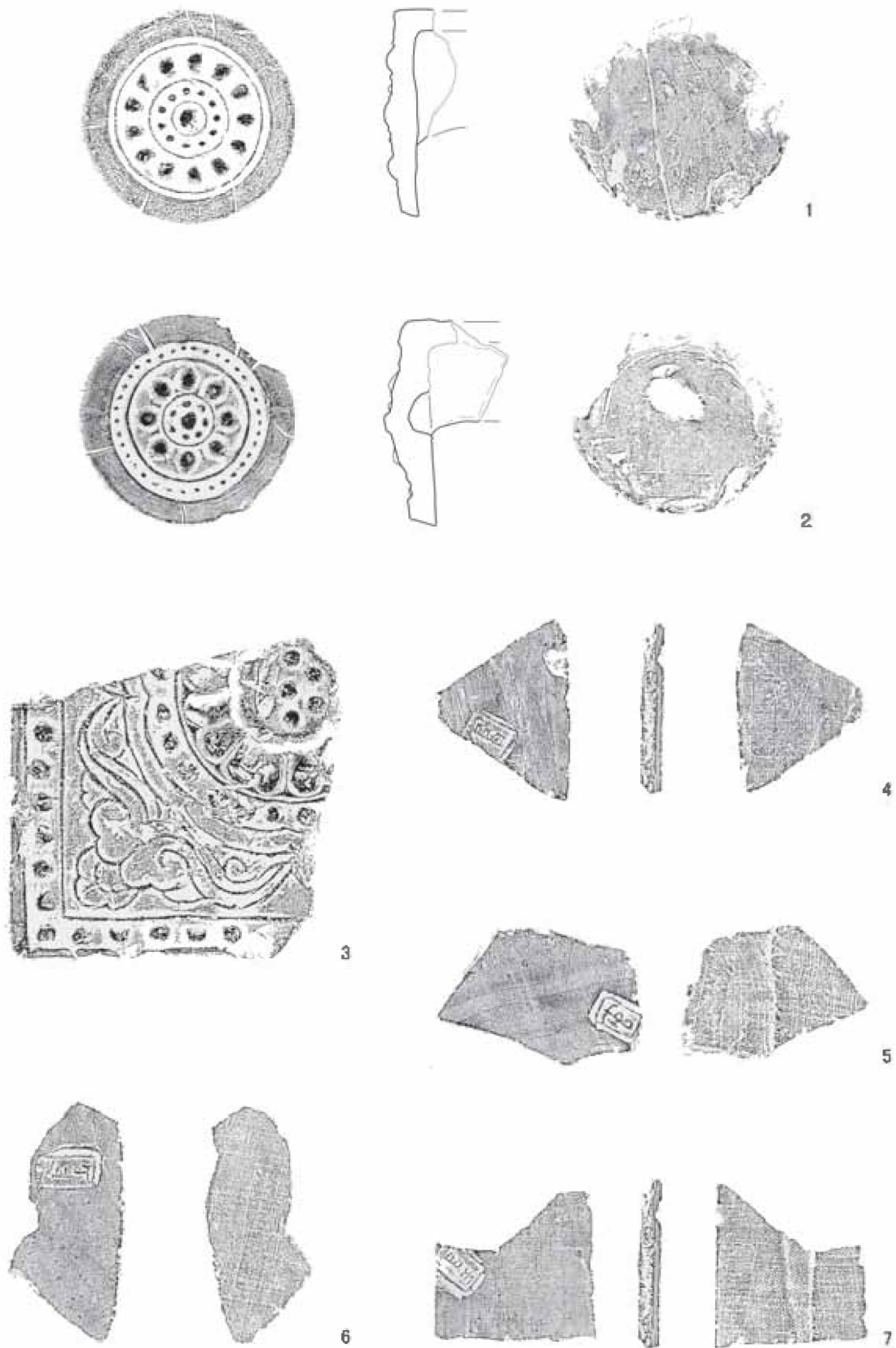
図版2 揚州城出土の丸瓦、平瓦、紋様磚の型式分類

	丸 瓦	平 瓦	文字瓦	獸面磚	紋様磚
唐代前期		 3			
唐代中期	 1	 4		 8	
唐代後期	 2	 5	 6		 9
			 7		 10



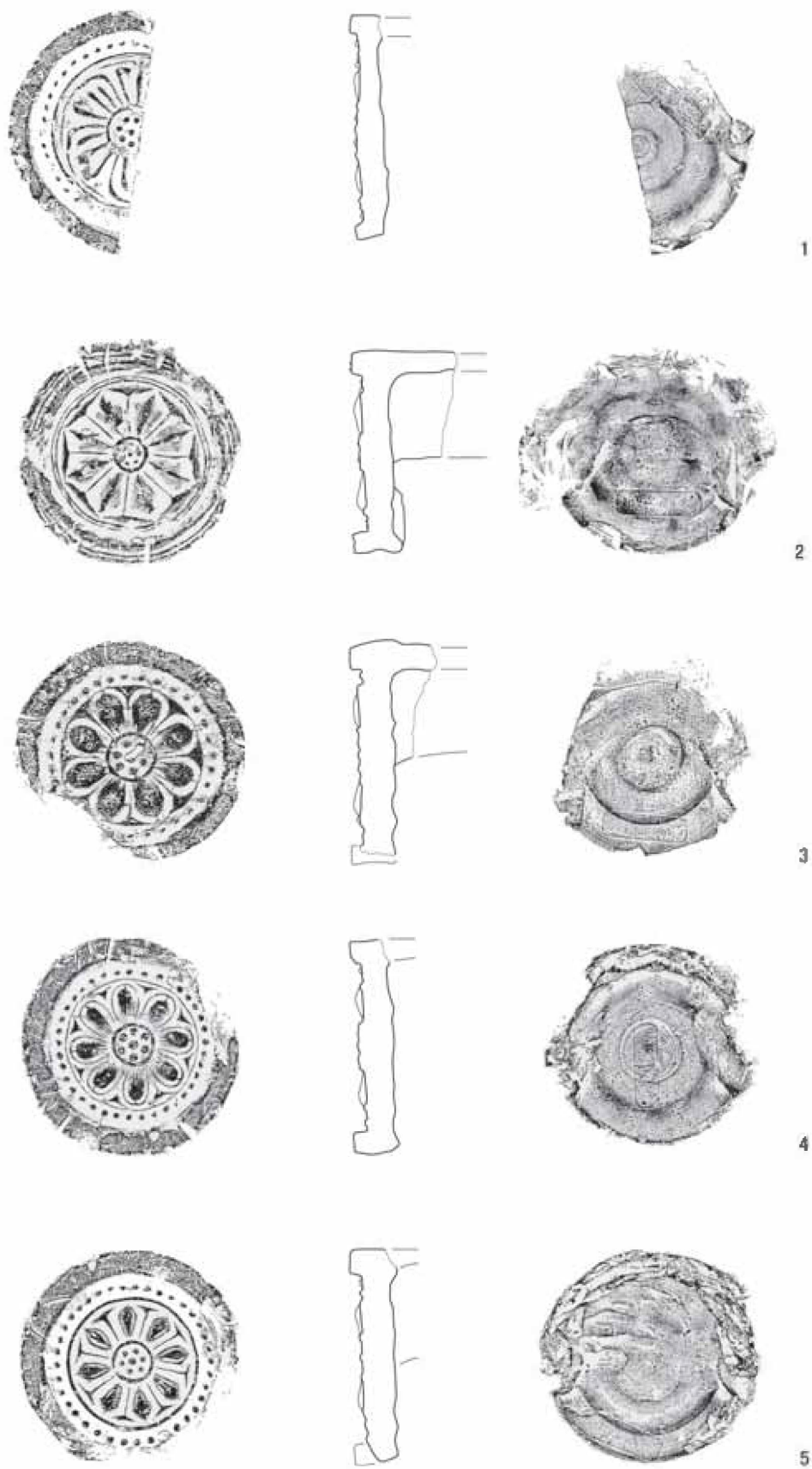
1. 06YSDJ ⑨ :1 2. SD ③ :24 3. 06YSDTG 井 :20 4. SD ③ :26

附圖 1 揚州唐朝出土瓦 (1:4)



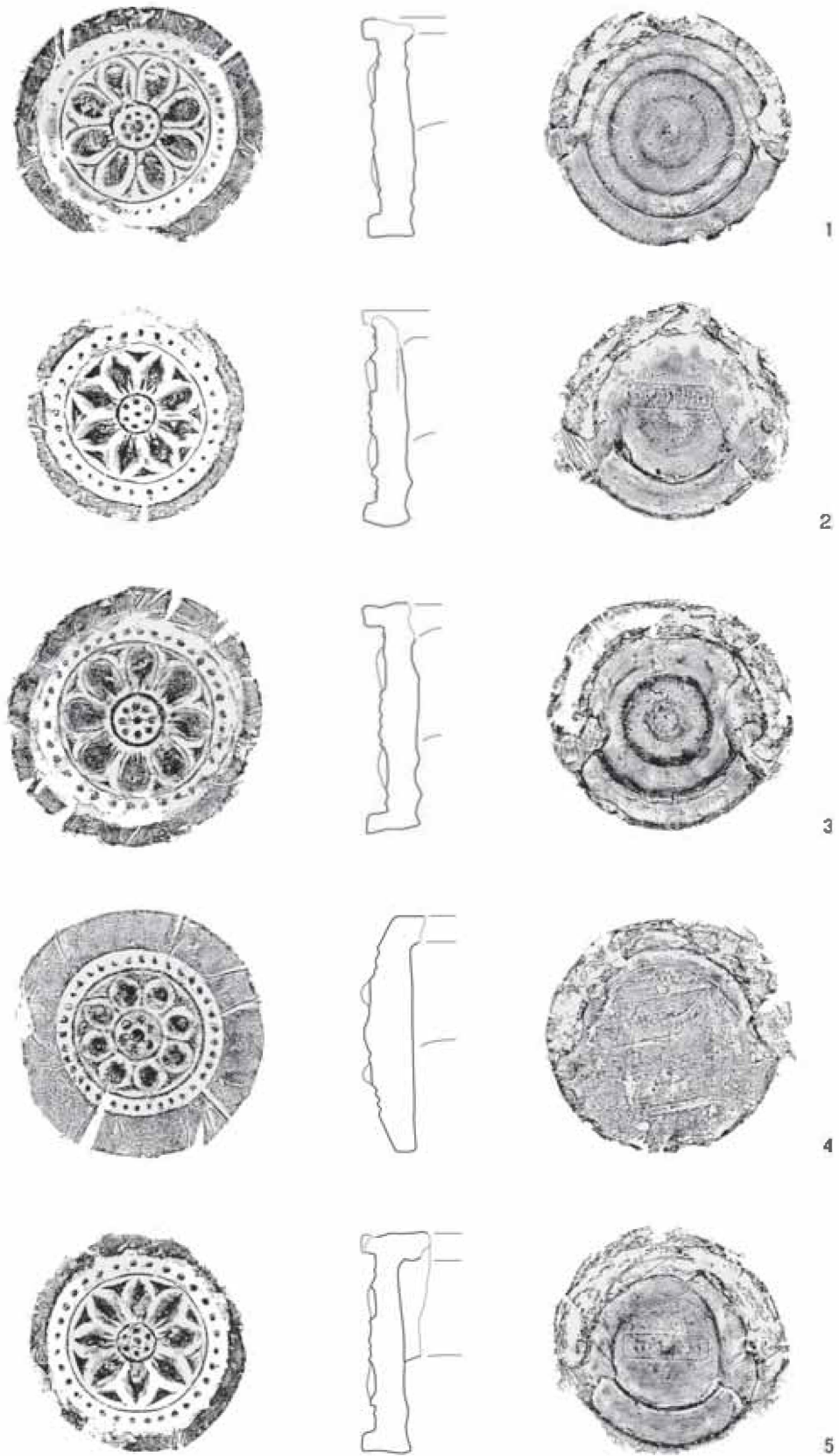
1. 06YSDTG 井 :5 2. 06YSDTG 井 :1 3. 06YSDTG1 井 1 4. SD ③ :33
5. SD ③ :31 6. SD ③ :35 7. SD ③ :32

附図2 揚州唐朝出土瓦(1:4)



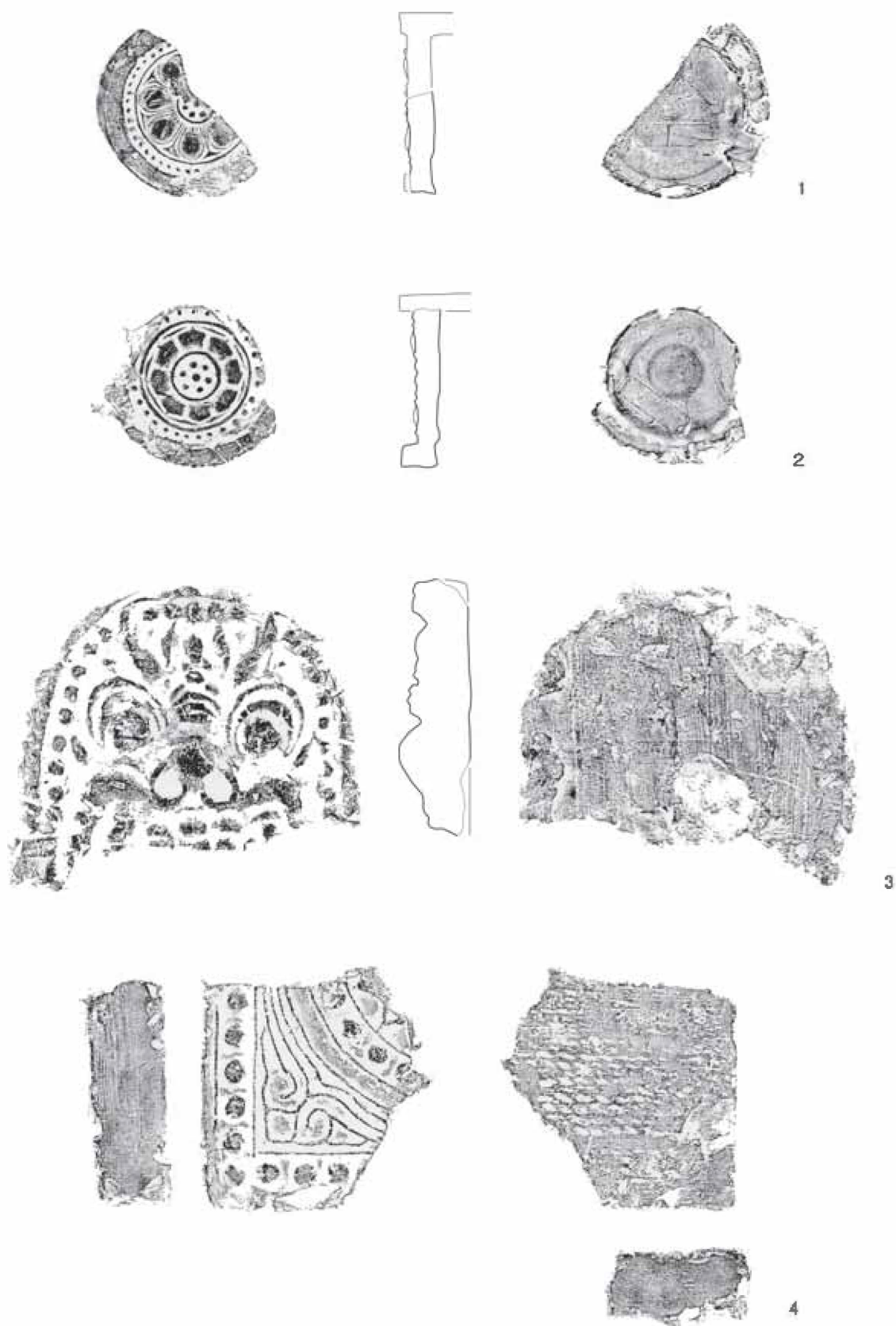
1. 06YCJT2 ④ :10 2. 07YCJT4 ④ H2:4 3. 06YCJT3 ④ :7 4. 06YCJT3 ④ :9 5. 06YCJT3 ④ :6

附圖 3 揚州唐朝出土瓦 (1:4)



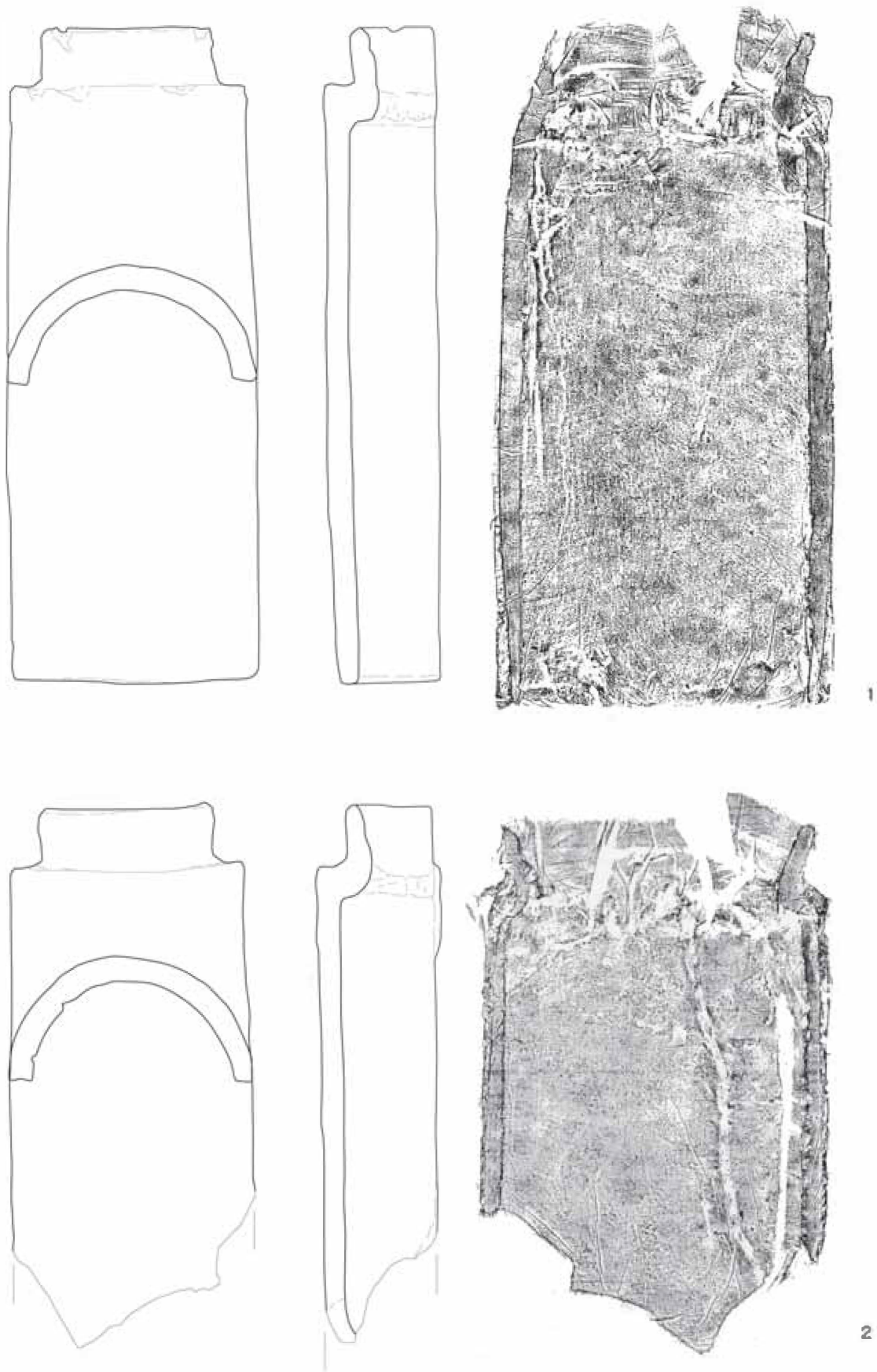
1. 06YCJT4 ④ :23 2. 06YCJT4 ④ :22 3. 06YCJT4 ④ :18 4. 06YCJT2 ④ :8 5. JW ④ :10

附図4 揚州唐朝出土瓦(1:4)



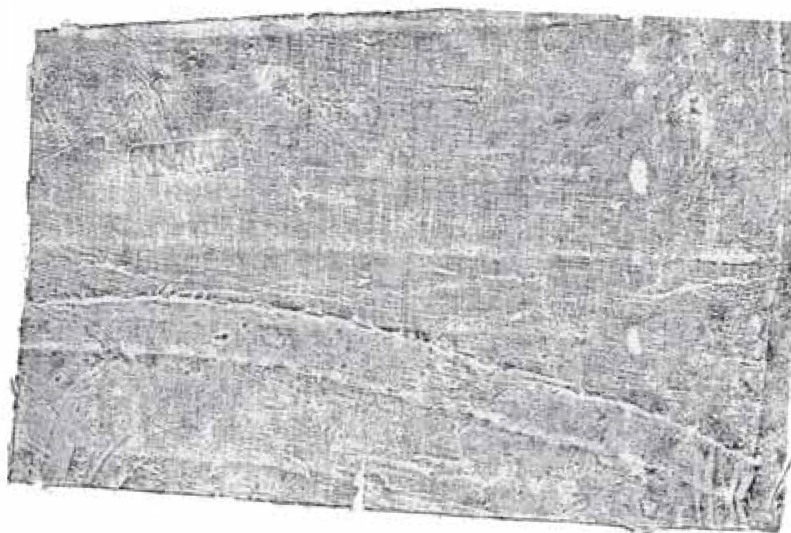
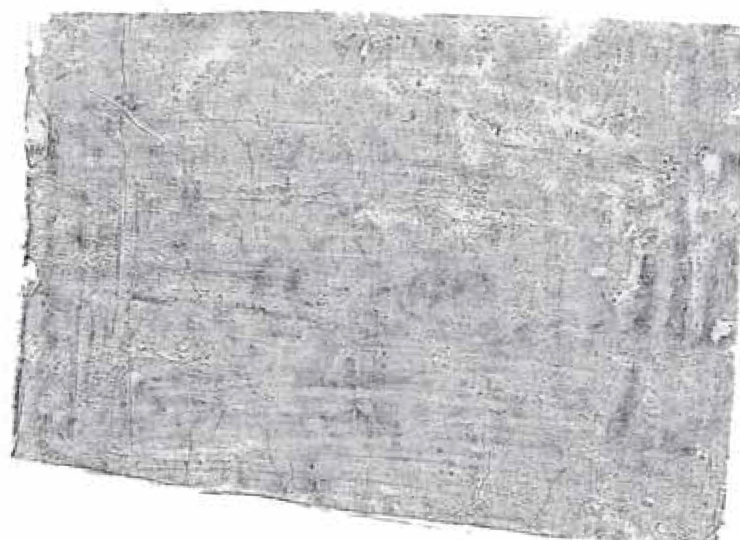
1. 06YCJT4 ③:1 2. 06YCJT2 ③:1 3. 06YCJT2 ④:11 4. JW ④:13

附图 5 扬州唐朝出土瓦 (1:4)



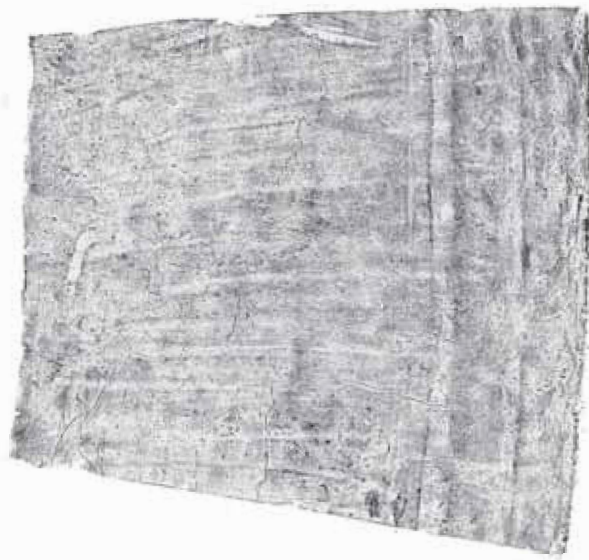
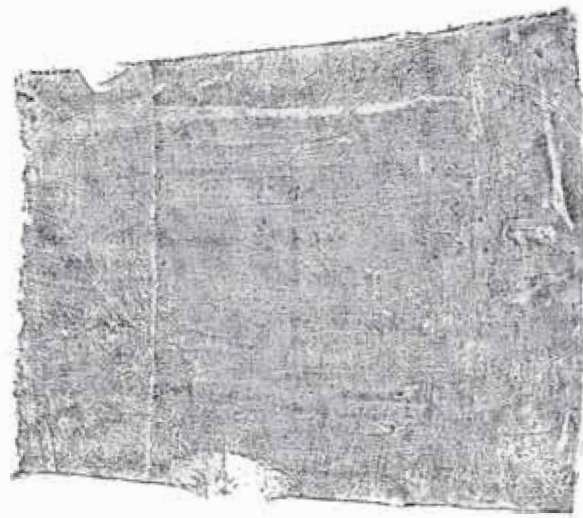
1. 04YWGE ④ :39 2. WG ④ :40

附図6 揚州唐朝出土瓦(1:4)



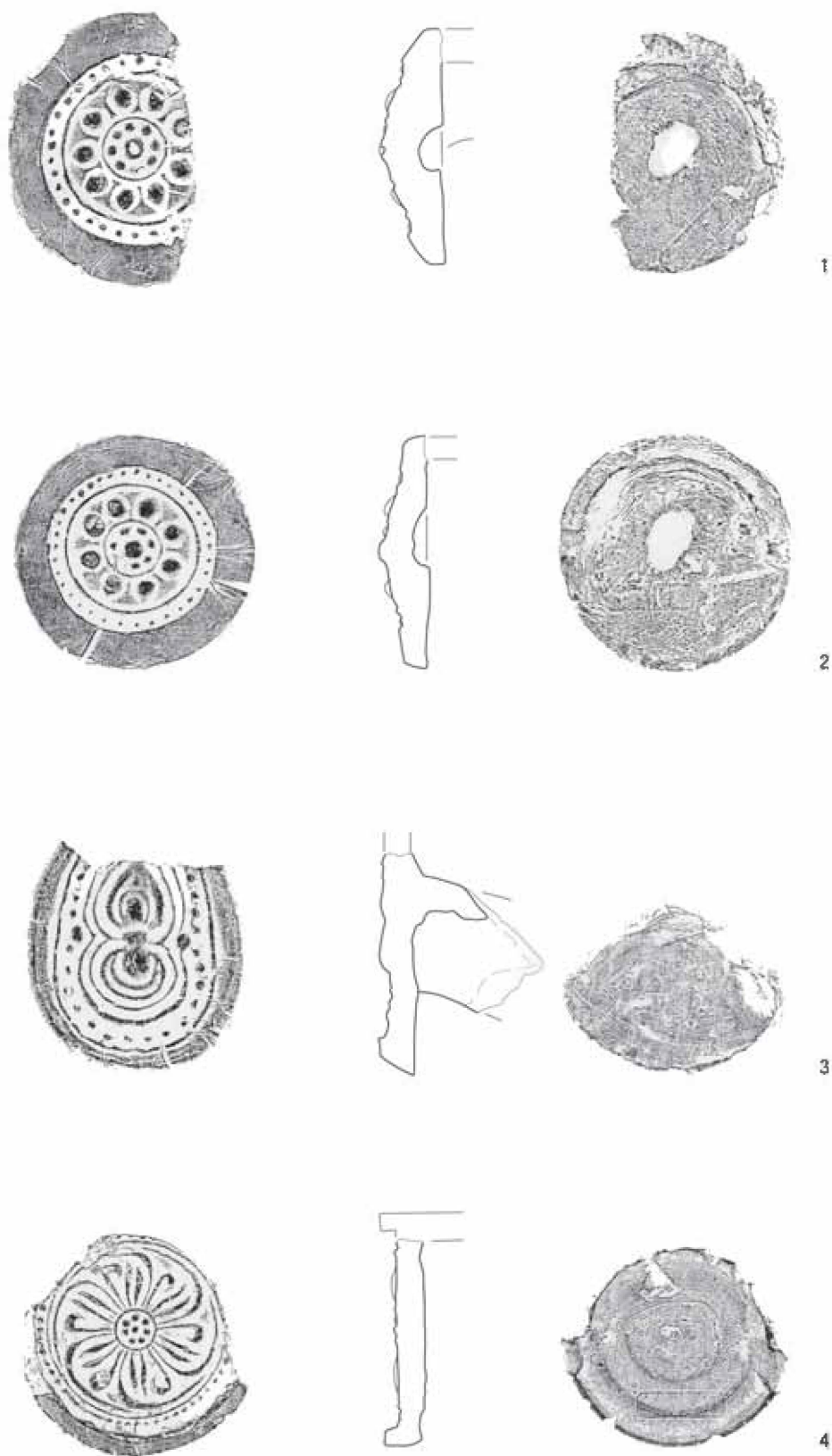
04YWGE ④ :29

附圖 7 揚州唐朝出土瓦 (1:4)



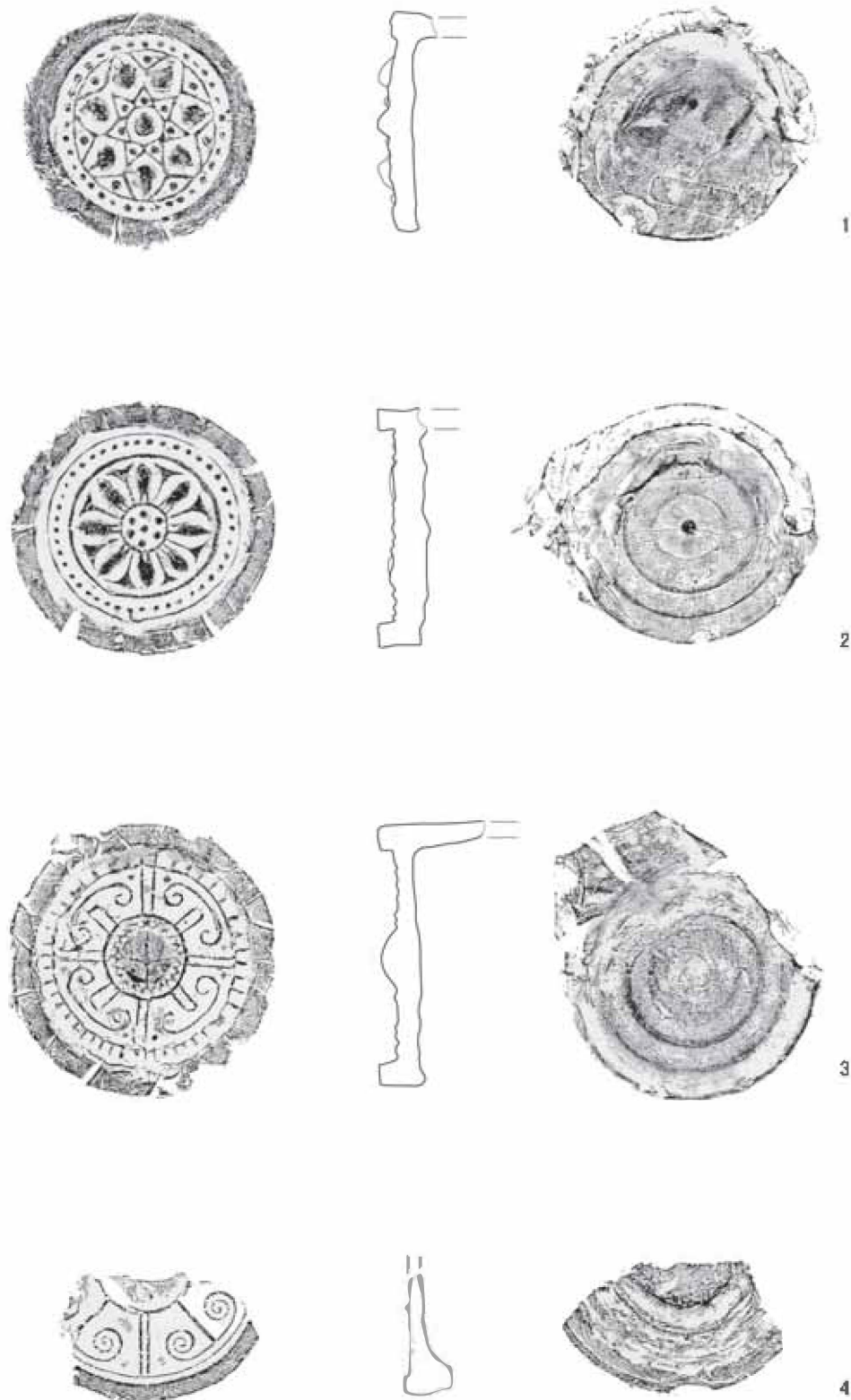
1. WG ④ :30

附図8 揚州唐朝出土瓦(1:4)



1. WG ④:23 2. XM ③:36 3. XM ③:37 4. SY ④:19

附圖 9 揚州唐朝出土瓦 (1:4)



1. 06YF-05-03T3 ③ :4 2. 06YF-05-03T ③ H3:1 3. KSS ⑥ :20 4. SKSS ⑥ :38

附図 10 揚州唐朝出土瓦 (1:4)